

敦煌『壇經』新出殘片跋

方 廣 鋤
神野恭行譯

禪宗は、中國化された佛教である。そして『壇經』はこの禪宗における基本經典であり、中國人の手によって撰述され、「經」としての權威を得た、唯一の佛教經典である。このことだけをとっていても、『壇經』が中國佛教史のなかで重要な地位を確立するには十分であった。しかし、かえってそのために、『壇經』は不幸な運命をたどることとなる。『景德傳燈錄』卷28に、慧能の弟子である南陽國師慧忠が感慨をこめてこう語っている。「吾れ比遊方するに、多く此の色近ごろ尤も盛んなるを見る。三、五百の衆を聚却し、雲漢を目視して云く、是れ南方の宗旨なりと。他の『壇經』を改換し、鄙譚を添糝し、聖意を削除して、後徒を惑亂す。豈に言教と成らんや。苦哉。吾が宗は喪びたり。」慧忠が世を去ったのは唐代宗の大曆十年(775)で、慧能が亡くなった唐玄宗の先天二年(713)から、わずか六十年餘りしか経っていない。このことから明らかなように、後に幾種類もの異なる傳本が世に現れたことは、すこしも不思議なことではない。

敦煌本『壇經』の出現によって、多くの人々の注目を集めたのは、なんといっても、それがこれまでに知られているなかで、最古の寫本であったからである。敦煌本『壇經』の研究を通して、慧能の『壇經』の原形をたどり、禪宗についての研究がさらに進むことが期待された。そのため、今世紀に入ってから、敦煌本『壇經』にもとづく新たな校録や研究成果が絶え間なく発表され、傳世本『壇經』および禪宗の研究をよりいっそう促すことになったのである。

敦煌遺書は世界各地に分かれて保管されており、敦煌本『壇經』にも何種類もの寫本が存在している。現存する資料によると、最初に発見されたのは

大谷探検隊の吉川小一郎が敦煌で得た冊子本の『ろ36號』であった。これは、後に旅順博物館に收藏されることになり、『大谷光瑞氏寄託經卷目録』（稿本、年代不詳、1914～1916年頃のもの）、葉恭綽『旅順関東廳博物館所存敦煌出土之佛教經典』（『圖書館學季刊』第一卷第四期、1929）、『関東廳博物館大谷家出品目録』（『新西域記』下卷、1937）の中に記録されているが、残念なことには、この寫本の行方は現在のところわかっていない。ただし、龍谷大学圖書館に首尾二葉の寫眞が残っている。首葉の寫眞は、『壇經』の首部にあたり、首題と5行の經文が映っているだけだが、そこには、研究者にとって重要な情報が隠されている。末葉の寫眞は『大辯邪正經』の末尾にあたり、「顯徳五年己未歲三月十五……」の題記と經文の雜抄がある。1989年、井之口泰淳、白田淳三、中田篤郎氏らが、『舊関東廳博物館所藏大谷探検隊將來文書目録』のなかで、この二枚の寫眞を發表したが、寫眞二枚だけであったため、いまでは、この寫本が『壇經』の完本かどうかを判断することはできない。1994年に、このことについて、龍谷大学の先生に尋ねたところ、當時撮影されたのは首尾二枚のみで、すべてを撮影しなかったということであった。この寫本そのものが行方不明であるためか、これまで研究者の注意を惹かなかつたが、1994年、潘重規氏が『敦煌壇經新書』の中で、はじめてこの寫眞を用いた校本を發表された。

二番目に発見された英國のS. 5475も冊子本で、首尾完全である。1923年矢吹慶輝によって発見され、1928年『大正新修大藏經』第四十八卷にその録文が收められ、1930年『鳴沙餘韻』で寫眞が公開され、50年代には大英博物館がマイクロフィルムを公開した。このため、長期に亘り、敦煌本『壇經』の研究は、この寫本にもとづいて行われてきたのである。

三番目に発見された北京圖書館所藏『岡48號』は、巻軸装で、『壇經』の後半部分と尾題が残っている。これについては、1930年に、陳垣氏が『敦煌劫餘録』のなかで注を附して收められたが、研究者の注意を惹かなかつた。北京圖書館が50年代と80年代初頭の二回にわたり、この寫本のマイクロフィルムを公開したが、その時も研究者の注目を集めるには至らなかつた。1986年

には、黄永武氏が『敦煌遺書最新目録』に再録し、1991年になって、田中良昭氏がはじめて校録と研究論文を發表された。

四番目は現在敦煌縣博物館所蔵の『敦博077號』で、冊子本の首尾完全なものである。これは、もと敦煌の任子宜家が所蔵していたもので、1935年に敦煌千佛山上寺より手に入れたということであった。この寫本には、數種類の禪宗文獻が抄寫されており、『壇經』はそのうちの一つにあたる。他に、獨孤沛の『南宗定是非論』、神會の『壇語』、淨覺の『注般若波羅蜜多心經』などが含まれている。40年代に、向達氏が敦煌で調査された際、これらの敦煌文獻を二度にわたって書寫し、『西征小記』（『唐代長安與西域文明』、三聯書店、1957）に収録された。これにより、この寫本の存在が世に知れ渡ることとなった。向達氏の書寫ノート二冊のうち、一冊は後に呂澂氏に贈呈された。呂澂氏は、そのうちの淨覺撰『注般若波羅蜜多心經』に整理を加えて『現代佛學』1961年第四期に發表されたが、他の文獻については整理と發表が行われていない。この書寫ノートは現在周紹良氏の手元にあり、もう一冊は北京大学圖書館に保管されている。ところが、原寫本の方は、これまで所在がわからず、多くの人々が八方探し回っていた。そして、1983年、周紹良氏が敦煌縣博物館に收藏されていることを突き止め、すぐさま寫眞撮影が行われた。1993年には、楊曾文氏ははじめて校録研究を發表され、任繼愈主編『佛教宗派全書・禪宗編』（江蘇古籍出版社）には、その寫眞が収められている。この寫本は、現在知られている敦煌本『壇經』のなかでも、書寫の質が最も良く、校勘と研究のうえで最も高い價值を持つものである。

以上が、今日に至るまで学界で知られている四種類の敦煌本『壇經』についての大略である。

1997年4月、筆者が北京圖書館で敦煌遺書の整理作業中に、これまで篇名が附けられていない遺書の中から、『壇經』の殘片であると鑑定したものを以下に公開する。これは、現在までに確認されている『壇經』の五番目の寫本となる。

この遺書の編號は『北敦8958號』、一枚のみの殘片で、首部は切り取られ、

末尾は欠けている。残片の形状は17cm×25.3cm、黒の罫線が入り、あわせて10行。このうち前半の5行に經文が書寫され、後半の五行は空白となっている。一行17字。内容は次の通りである。[*]

(前剪)

1. 迷妄即自悟、佛道成行誓願力。今既發四弘誓
2. 願訖、與善知識無相讖悔三世罪障。大師言：善
3. 知識！歸依覺、兩足尊；歸依正、離欲尊；歸依淨、
4. 衆中尊。從今已後、稱佛爲師、更不歸依餘邪迷
5. 外道。願自三寶

(後闕)

もとの装幀形式は卷軸装であった。この5行のうち、1行目の「迷妄」から「大師言善知識」までと、「大師言善知識」から5行目の「三寶」までは、『壇經』の中では、前後別々の離れたところにある經文で、この間には140字あまりの文字が抜けている。これは、明らかに同じ「大師言善知識」の部分をはさんで本文をとばしてしまったことによる書寫漏れの一例である。古代の敦煌寫經では、正本となる寫本に寫し間違いがあつて破棄する場合は、紙を節約するために、誤寫部分を切り取って白紙を貼り附けたのち、そこにつづけて書寫し、切り取った誤寫部分は、必要に応じて他に利用することがあつた。この残片の背面にも他の文獻が書寫されているのは、このことを證明するものであり、同様の例は敦煌遺書にはよく見られる。背面には、「午時無常偈」、「中夜無常偈」、「後〔夜〕無常偈」など6行にわたり書寫されており、すべてを寫し終える前に破棄されたため、雜抄の分類に入れられたのである。

ここで説明しておかなければならないが、この残片の元の編號は『有79號』で、北京圖書館所藏敦煌遺書四大部分の中の『敦煌石室寫經詳目續編』に含まれるものである。北京圖書館所藏敦煌遺書四大部分の成立と『敦煌石室寫經詳目續編』部分の状況については、拙著『北京圖書館藏敦煌遺書勘察初記』

【**】（『敦煌學輯刊』1991年第二期）を参照して頂きたい。この部分の敦煌遺書は合計1192巻あり、このうち篇名がまだ同定されていないものが229巻、篇名が付けられない分類に属するものが79巻ある。我々が新たに編纂している『北京圖書館藏敦煌遺書總目録』では、北京圖書館所藏の敦煌遺書すべてに新たに統一した編號を付け直しているが、この残片は『北敦8958號』と正式に決められている。

『北敦8958號』を發見してから、これまで廣く同學の士に公開してきた。これにより、すでに研究を進められている先生がおられるので、ここではその校勘價值について論評することは省き、以下に、その他のいくつかの問題点について論じてみたい。

上で紹介した敦煌本『壇經』五種類のうち、三種類は冊子本であり、二種類は卷軸装であった。『北敦8958號』が發見されるまで、見ることができた卷軸装寫本は『北岡48號』だけであった。その形態からみて、『北岡48號』は正規の寫經ではなく、經文の雜抄であることは明らかであった。そこで、私は以前からずっと一つの推測を持っていた。つまり、南宗禪ではすくなくとも神會系の南宗禪が『壇經』を傳法の拠り所として、門弟ならだれでも一部ずつ攜帶していたのであれば、『壇經』の基本的な形態は冊子本であったはずであると。もしもこのような推測が成り立つのならば、冊子本という装帧形式が誕生した年代はぐっと引き上げられることになるだろう。しかし、この推測にはなんら確たる根拠もなかったため、これまでは發表もせず、胸にしまつてあためてきた。ところが、今回發見した『北敦8958號』の形態から見て、その紙質はよく見られる寫經紙で、長さは判らないが、幅は同時代の寫經と一致し、また黒の罫線が入っており、規格も同時代の寫經と一致して、一行17字であった。『北敦8958號』は破棄された誤寫稿であったが、それだからこそ、當時は慎重に書寫され、完成稿の質はかならずや優れたものであった、ということになる。このように數々のことがらすべてが、敦煌にはかつて標準的な卷軸装の形式によって書寫された『壇經』が存在していたことを物語っているのである。そこで、私が以前から抱いていた推測は成り立たないこと

になってしまった。

現存する敦煌本『壇經』は、すべて南宗神會系の傳本にあたり、このことはほとんど疑いない。神會系は『壇經』を傳法の拠り所とし、『北敦8958號』の形態は敦煌の現地で『壇經』が書寫されたことを反映している。このことから、南宗神會系が敦煌に伝わっていたことは、疑う餘地がないと言わねばならない。敦煌本『壇經』に巻軸装と冊子本が存在することからみて、これら二種類の流傳の形態は時代の違いを物語っており、また、南宗神會系がかつて敦煌の地で長期にわたり流傳して絶えることがなかったことをも示しているのである。

北宋の時代、敦煌は西北の地に孤立しており、北宋王朝と遼王朝に對して同時に臣下の禮をもって朝貢し、等距離外交をとっているかのようであった。しかし、實際のところは、遼王朝では『華嚴經』が盛んに用いられ、『壇經』は禁止されていたが、敦煌では禪宗と『壇經』が廣く行われ、北宋王朝の紀年が用いられていた。このことからいっても、敦煌の等距離外交は表面的で、親宋疏遼が實態なのである。

『北敦8958號』によって、敦煌ですくなくとも一本は質の高い巻軸装『壇經』が書寫されたことがわかるのだが、その残片のもとの部分は現存の敦煌遺書からは發見されていない。敦煌遺書のほとんどがすでに公開されていることからいって、この『壇經』はおそらくはもともと藏經洞に收められなかったのではなかろうか。そうであれば、もちろん發見されるはずはないのである。敦煌遺書「廢棄說」の立場から言えば、このことは當然のことである。「避難說」あるいは「圖書館說」の立場から言えば、こういった状況はまったく不思議なことで、また不可解なことである。それゆえ、敦煌遺書のなかに誤寫された『北敦8958號』が存在していながら、『北敦8958號』が切り取られた元の正本となるべき『壇經』が見あたらないということは、まさに敦煌遺書「廢棄說」のもう一つの證據となるものである。

今日に至るまで、敦煌本『壇經』の整理に携わってきた研究者は、その他の系統にあたる『壇經』の流布本を參考にして、敦煌本を修正、改訂してき

た。敦煌『壇經』の諸本が十分に発見されるまでは、そのような方法は仕方のないものであったかもしれない。しかし、敦煌本『壇經』がすでにいくつも発見されている今日においては、敦煌本以外の系統に属する『壇經』の影響をすべて除き、純粹に敦煌本のみを利用した校勘を進め、敦煌本『壇經』の精校本を作らなければならない。そして、これをさらなる研究の基礎とし、あるいは出発点とすることが、より価値のあることは疑う餘地がない。

最後に、西夏文譯『壇經』について觸れておかなければならない。

これら西夏文譯の殘片は、古くは今世紀二十年代に発見され、三十年代には羅福成が研究論文を發表し、日本の学者の研究成果も發表されている。その後もひきつづき発見され、現在收藏されている場所は異なるが、合計12の殘片が存在する。これには、史金波氏考釋の譯文『西夏文六祖壇經殘頁譯釋』（『世界宗教研究』1993年第三期）がある。氏が筆者に語った話では、紙質や筆蹟などの形態から判断して、これまで研究してこられた各殘片は、もともとすべて同一寫本に歸するものであるということであった。いずれにせよ、現存するそれぞれの『壇經』傳本のうち、西夏本の年代と流布していた地域は敦煌本に最も近いもので、文脈も敦煌本に一番近いものである。このことからいっても、西夏本は我々が敦煌本『壇經』を研究する上で重要な參考資料と成り得るのである。

[譯注]

* 『北教8958號』（北京圖書館藏）の寫眞は、卷頭を参照。

** 『北京圖書館藏敦煌遺書勘察初記』『禪文化研究所紀要第二十三號（1997.6、禪文化研究所）に、日本語譯を収める。